

第4章

決勝戦にむけて

キャプテン谷口にとって最後の夏の大会、苦しみながらも勝ち進んで、とうとう学校はじまうてはじめて地区予選の決勝戦にすすむことができた。とくに準決勝は延長戦のすえ隅田中を倒しての勝利だった。ただ決勝で対戦する青葉学院はここ数年たてつづけて全日本大会で優勝しており、地区代表は青葉学院いがい考えられないほど強いチームであったのである。

5・1 野球部の練習中

加藤「ナイス、セカンド!」
校長「おおっ。」
生徒C「やるーっ。」
校長「だれかね、あのセカンドを守ってる生徒は?」
生徒C「いやだなーっ、しらないんすか校長先生。イガラシって一年生ですよ。」
校長「ほう、一年生でレギュラーをつとめておるのかね。」
生徒C「守備も、バッティングもばつぐんですよ。なにしろ二年生の丸井がはずされたくらいですからね。」
生徒D「よせよ!」

話をしているところをイガラシがはいつたためにレギュラーをはずれた丸井がつつむきながらバットをもってあるいていく。

生徒C「あ…、き、きこえちゃったかな?」
生徒D「レギュラーをはずされてからあまり元気がないからな。」

5・2 練習後の部室で

部室の前の手洗い場ではナインが練習の汗をおとしている。

高木「いやー、きょうもきつかったなあ。」
松下「なにいつてんだこのぐらいやんなくちゃ、青葉といい試合なんかできないぞ。」
高木「わかってるよ、そりゃ負けるにしてもいい試合だけはしたいからな。」
島田「そつよ。」

部室の中では丸井が退部届けを持って、いつキャプテンにとどけようかなやんでいた。そこにナインよりもさきに谷口がはいってきた。

谷口「なんだ、丸井ここにいたのか。ちょっと相談したいことがあるんだ…」
丸井「ばくもキャプテンに話があるんです。」
谷口「なんだ話って?」
丸井「どうぞ、キャプテンおさきに。」
谷口「じつはナインのことなんだが…、どうもほんとの青葉がわかっていないよつだ。このさい青葉の練習を見学させようかとおもってな。」
丸井「はあ…」
谷口「かといって青葉の練習をみて、ナインが自信をうしなってもこまるしなあ。」

丸井「そんなにすごいんですか？」
 谷口「まあ……」
 丸井「だったら、みせたほうがいいんじゃないスかねえ、みんな青葉といい試合がしたいっていつてるんですから。」
 谷口「うーむ。」

そこに部員が汗をながしおえて部室にはいつてきた。

松下「あれ、ふたりともまだそんなかつこうしてんですか。あいてますよ手洗い場。」

谷口「みんなちよつときいてくれ、あ、丸井、おれに話があつたんじゃないのか？」

丸井「い、いえ、いいんす。」

谷口「あすは、青葉へ見学に行くぞ。」

松下「いいですね、敵情視察ですね。」

島田「おれ弁当もつていこつと。」

部室の外で丸井が退部届けをもつて考え込んでいる。

丸井「キャプテンも決勝を前に大変なんだなあ、退部届けはおりをみてわたそう。」

5・3 青葉学院見学

次の日、バスにゆられて青葉学院までやってきた。バスの中で谷口はあまり部員と話をせずにつつまきかげんにすわっていた。バスが青葉学院についた。

松下「なつかしいでしょキャプテン！一年ちかくもかよつたんですから。」

谷口「まあ……」

松下「青葉学院つておもつたより小さいですね。」

谷口「ここは野球部の寮だ。」

部員「寮……？」

谷口「青葉は野球の名門だ。そのため部員は全国各地からあつまつてくる。だから寮が必要なんだ。」

部員全員あぜんとしてキャプテン谷口の話をきいていた。

ナインはグラウンドにはいつてまた驚いた。青葉のグラウンドはまるでプロなみの設備と陣容だったからである。谷口は昔顔なじみの吉田をみつめて青葉の部長に見学の申し出をした。

青葉の練習はあまりにもすごかった。バッティングピッチャーの投げる球の速さもそうだがその球をバッターはかんたんに外野スタンドにまではこんでいた。そのすごさにおどろきながらも墨谷ナインは青葉の練習をみていた。

青葉部長「よつし！二軍の練習はそこまでだつ。補欠はグラウンドの整備にかかれ！」

加藤「に、二軍だつて……」

部員「……」

そこに青葉のレギュラー選手がグラウンドにはいつてきた。

5・4 青葉学院見学後、部室で

谷口「みんな、きょうの見学で青葉がよくわかったとおもつ、それでこれからはこのスケジュールでやってほしい。」

小山「ふへーっ。」

松下「朝、四時からだつて……」

遠藤「しかし、ただ練習時間をながくしたつてからつて、そつきゅつにつまくな

るとはおもえませんが……」

高木「そつですよ！」

イガラシ「やらないよりましでしょ！」

遠藤「そ、そりやそつだけども。」

谷口「ただしこれからシートノックもフリーバッティングも定位置の半分の距離からおこなう。」

松下「は、半分だって…そんな、いくらなんでもむちゃですよ。」

谷口「まともに青葉と試合をするにはこれしか方法はないとおもっただけど。」

イガラシ「ないね、これしか。」

加藤「それもそうだな、「このままじゃいい試合どころか足もとにもおよばないぜ。」

高木「うむ。」

小山「ようしみんなやろうじゃないか。」

松下「やるう、やるう!」

島田「あしたからがんばろうぜ!」

イガラシ「ブツ!」

谷口「あしたからじゃない、いまからだ!」

高木「だってもうタマなんかみえませんよ。」

谷口「タマがみえなくてもすぶりはできる。」

5・5 練習後の部室

きびしい練習は雨の日もつづけられた。はじめての決勝戦進出ということでおおぜいいた見物人もあまりの練習のげしさに、みるにたえかねだれもいなくなった。

ナインは今日の練習でできたケガのてあてをめいめいしている。

加藤「まだか、ぬれタオル。」

島田「うわっちつち!」

高木「そーっとだぞ、そーっと。」

谷口「みんなとれるまでつづけるぞ。みんなあすもはやいがおくれるな!」

そういつて谷口はナインよりもさきに帰った。

高木「ちゃつ、まったくキャプテンがうらやましいぜ……ただノックさえしていいりゃあいいんだからな。」

小山「みてくれこのアザ……」

遠藤「おれなんて三本もつき指だぜ。」

島田「おれたちだって生身の人間だ、ちつとは考えてほしいよ。」

浅間「ほんとになあ……」

小山「こんなことつづけていたら、試合までにぶっこわれちまうよ。」

遠藤「まったくだ。」

松下「試合まえにこわれちまったらもともこもないぜ。みんなキャプテンに抗議しよつぜ!」

加藤「そつだ、そつだ。」

イガラシ「すぎだね、抗議が……」

小山「松下よせよ、こんなバカあいてにするの、それよりはやくいこうぜ。」

あやうく松下とイガラシがケンカしそうになったが、小山が中に入りことなきをえた。ナインはきがえをすませて谷口の家までむかった。もちろん猛練習の抗議をするためである。部室にはイガラシ一人だけぼつんととりのこされたかっこうになった。

イガラシ「まったくどうやってあんな連中をキャプテンはここまでひっぱってきたんだろっ。」

5・6 谷口の家

イガラシをのぞくナインが谷口の家に来た。丸井も特訓には参加してなかったが、きのうわたしそこねた退部届けをもってみんなといっしょについてきた。

部員「こんばんはーっ。こんばんはーっ。」
 母「おや…タカオの友だちかい？」
 松下「あ、あのう、野球部のもですがキャプテンいますか。」
 母「タカオなら御岳神社にいつているよ。」
 松下「御岳神社…？」
 母「ここをまっすぐいったつきあたりだよ。」
 部員は谷口の母親からつけられた道を歩きはじめた。
 加藤「神社なんかになににいったのだろう？」
 松下「青葉に勝ちますよになんて願をかけにいったんじゃないか。」
 神社にちかづくとなにやら音がきこえてくる。「ズン！」「バキ！」
 そこでは谷口と父親が練習をしていた、父親の手づくりマシンからくりだすタマを谷口がとろつとしていた。

加藤「キャプテンじゃ…」
 松下「しっ。」

加藤が谷口に声をかけようとすると、松下にとめられる。ナインは谷口と父親の学校以上のきびしい練習にあつとつされる。

父「いくぞっ。」
 谷口「くくそっ。」
 父「だいたいぶがタカ、いくらなんだってちよつとむちゃしすぎじゃねえか。」
 谷口「お、おれみたいに素質も才能もないものはこうやるしか方法はないんだ。」
 父「しかしなあ……」
 谷口「さあつけてよとつちゃん。」

けつきよくナインは谷口に声をかけずにきた道をひきかえしはじめた。

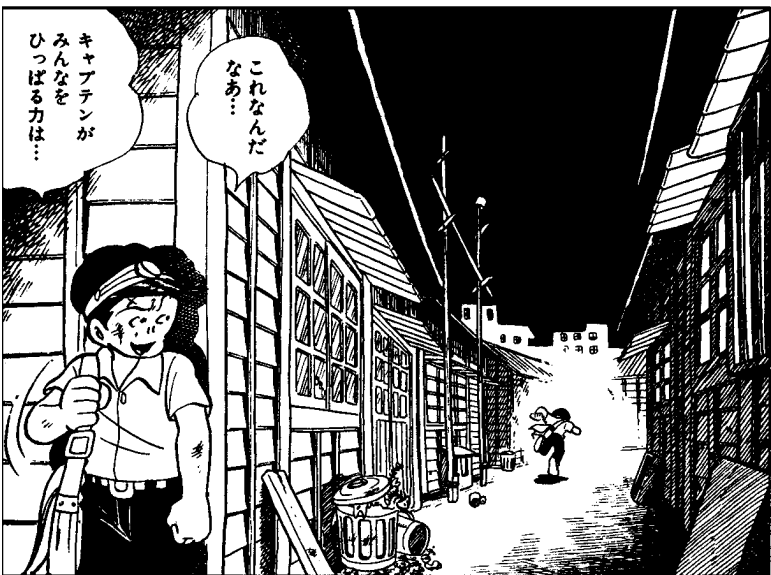
松下「お、おれたちのコーチにおわれてこんなところで練習してたんだ…。」
 部員「……」
 加藤「おれ家までランニングしよつと。」
 松下「お、おれも！」
 小山「おれも！」
 丸井「……」

丸井は一人神社のまえにとりのこされてしまった。ポケットにいれてあつた退部届けをだしてじつとみつめている。

丸井「くくそっ。」

退部届けをビリビリにひきさき、地面にたたきつけた。そしてナインの後をおうように走りだした…このようすをとくからみている一人のすがたがあつた。

イガラシ「これなんだなあ…、キャプテンがみんなをひっぱる力は…。」
 イガラシはナインに気づかれることなくそつとあとをつけてきたのだった。



キャプテンがみんなをひっぱる力は…

これなんだなあ？